JNDC ニュース，No.27 (1973)

無くて七癖

中嶋龍三（法政大学）

私の小学校時代の恩師が，停年退職された後さる有名幼稚園の園長さんにと懇望されて，それを引受けられたのが2，3年前のことだった。つい先日，久し振りにお会いしていろいろと話したのだが，その時，「小学校の校長の時もそうだったのだが，朝は他の先生方よりも早く出勤して部屋で一日の計を練り，夜は皆が帰ったあとで校内を一巡し，点検してから学校を出る，という習慣が今でも続いている。どうも習慣だけでは片付けられないもの，つまり一種の癖だというべきかも知れないのだが，これは，校長とか園長とか，ある意味で人の上に立つ者にとっては非常によくない癖だと思っている。」といわれた。私も大いに同感である。第一に，人の上に立つ者は一年の計，十年の計，あるいは百年の計をめぐらすべきであって，一日の計を練ることによって下の人たちの自主性を損なうことがあったら，それはもってのほかである。第二に，上に立つ人があれもこれもと手を出すのはよろしくない。彼がずばぬけてすぐれていてなんでもできるなら兎も角――そんな怪物的人物はまずまずいる筈はない！――，そうでない限り，下の人たちにできるだけ多くのことを自由に経験させ，なんでもできるだけ広く見させ，そして十分に考えさせるだけの度量がなければならない。いくら癖だからといっても，人の上に立つ者としては，真田幸村が九度山に座して天下を知りつくしていたという故事を見習って，大いに心してもらいたいものである。

さて，前おきはこれくらいにして本論に入ることにしよう。

文学，芸術にあっては当然のことだが，客観的であるべき科学においてさえも，その方法や表現などに研究者自身の癖が感じとられることが多い。癖のある仕事の方がむしろ印象的であって，いわゆるいい仕事といえる場合が屢々である。そういう癖が最もよく表面に出るし，またそれを出すべき仕事の一つが評価作業であると私は思う。実験条件やその解析を十分に検討して評価をすることは勿論であるが，最終段階で推奨値をひき出すところで最も強く評価者の癖があらわれる。新しがりやは，より新しい実験データを重視するし，事無かれ主義の人は，多くの実験点があるデータにより大きな重みをかけようとする。極端なことをいえば，全部の実験データをじっと睨んでいてなんとなく自分の好みにあったデータを選び出して，なんらかの尤もらしい理由をつけてそれを推奨値として採用したって構わないではないか，と私は考えている。全部のデータを一緒くたにして平均をとって推奨値を求めることがよい場合もあるけれども，むしろ，評価者個人の判断によってその中の一つだけを推奨値として選び出す方が合理的である場合の方が多い。そこに評価者の癖がはっきりと反映されるのである。

数年前に，オークリッジのK.Wayが停年退職をした。彼女自身による準位構造の評価には勿論

のこと，彼女が編集していたNuclear Data SheetsにはWay女史の癖が非常に強く現われていた。彼は一瞬度肝を抜かれるような評価の仕方とかその表現とかを層々主張したものだったが，いま考えてみると，彼女の癖がかえってNuclear Data Sheets などを魅力的なものにしていたのであろう。Way 女史が引退した後のNuclear Data Sheets には，未だに彼女の癖が残っているものもなきにしも非ずであるが，しかし以前とは非常に変わった体臭を感ずるのは私だけだろうか。

八年目を迎えたＪＮＤＣニュースも，ここに新しい編集者を迎えて継続刊行されることになったが，願わくば斬新な癖を大いに発揮して，内容，体裁ともにもっともっと充実した刊行物になってもらいたいものである。"無くて七癖，有って四十八癖"などといわれているが，幾癖あってもよい。要は，発揮すべき癖を遠慮なくさらけ出してほしいものである（そうすることによって，好ましからざる癖が表面に現われそうになるのを，ある程度押さえられるのではなかろうか。）。